

被災者に厳しい生活再建への道のり

移動何でも相談会
仙台市若林区



佐藤彰子さん宅を訪問し、支援物資を届ける

セントラルキッチンで牛丼、混ぜご飯、デザートを提供

2回目となる「移動何でも相談会」が、5月21日、仙台市若林区の六郷中学校校庭で開催され、全国及び宮城民医連から90人が参加しました。今回は健康相談や地域訪問のほかに、セントラルキッチン宮城から牛丼500食、混ぜご飯100パック、フルーツゼリーなどのデザート600個を用意しましたが、大変好評ですぐになくなってしまいました。

六郷中学校は避難所になっていて約200の方が生活しています。健康相談と地域訪問あわせて34人と対話ができました。全体の参加者は950人でした。

長町病院の千葉明日香医師は、「60歳代男性でチェンソーなどの力仕事をしていて、両手が握れなくなっていた方がいました。お宅が全壊していて、普段血圧が高いと言われた事はないのですが、142/80でした。また、避難所にも行ってみましたが、プ

ライシーが保てる環境ではなく、2か月以上もこのような生活を続けることはとても大変で、早く仮設住宅などに入居できればよいのですが」と話していました。

保健師の横矢喜代恵（石川）、袴田智子（宮城・MSW）、大竹哲（宮城・事務）、神馬悟（宮城・事務）は、支援物資などを持参して、仙台市若林区今泉地区を訪問しました。

◇佐藤彰子さん（63）は、地震の直前にご家族が亡くなられ葬儀屋さんを見つけるのが大変だった。田んぼや畑が津波で塩を被ってしまった。地震などのことを考えると寝てもすぐ目が覚めてしまうとの事でした。一番心配なことは？と尋ねたら、屋根全体が壊れ、柱なども曲がったのに、家屋調査では「一部損壊」の診断でした。屋根の修理にはたくさんの費用がかかるのにと話してくれました。

◇佐々木やえ子さん（62）は、この地区では数少ない専業農家です。ハウスをやっていますが、津波でコマツナやホウレンソウなどの作物がほぼ全滅、僅かにダイコンだけが残ったといいます。これから収入は殆どなく、公共料金は一時的に引き落としは停止しているが、それが引き落とされるようになると、すぐに生活に困ってしまうとの事でした。訪問の後、佐々木さんは相談会場に見えられて、弁護士さんと相談していました。

◇佐藤はつよさん（75）は、若林クリニック友の会の理事さんです。息子さんが深層工事等などの建設会社を営んでいて、従業員も40人位います。会社が井浜にあったために7～8千万円する機械が流されてしまったとの事です。山梨の仕事の契約もとれていたのに、銀行からの融資が受けられるのか、国からの支援はあるのか、これからのことがとても不安ですと話していました。早速、会場で民主商工会のブースで相談しました。



佐藤はつよさん

民医連全国青年JB実行委員会で“なるせの郷”を弔問

5月21日、宮城で民医連全国青年ジャンボリーの実行委員会が開催されていますが、津波で職員3名亡くなり、利用者さんも犠牲になった松島医療生協



“なるせの郷”を弔問に訪れました。津波などの様子を青井克夫専務から説明を受けるとみなさん沈痛な表情になっていました。

全国JB事務局長の加藤大輔さん（京都）は、「被災地の様子を報道では知っていましたが、実際に現地に立ってみると、津波の破壊の凄まじさは言葉では言い表せない位で、想像を絶していました。宮城での全国JBの開催については、まだどうなるかわかりませんが、全国の仲間が集まって、何かできることはないのか考えたい」と話していました。